

特集 Withコロナ時代に思う

狭山市では6月下旬から公民館等の公共施設の利用が再開され、徐々にスポーツや文化活動をする姿が見られるようになりました。しかしながら、人々の活動が活発になるにつれ、東京都内、隣接県そして日本全土へと、新型コロナウイルス感染が再び広がっています。まだまだコロナ禍が納まる気配は無く、先は不透明です。

当文化団体連合会所属の団体においても、早くに年間活動の中止や、毎年の定期公演の延期を決断した団体も多いのですが、一方、イベント出演の目処は無くとも練習を再開したサークルも増えてきています。芸術は人々の心の支えとなり、人生を豊かにしてくれます。文化活動は人間の営みそのものといえるでしょう。私たちは新型コロナウイルスの恐怖に負けること無く、工夫をして芸術文化活動を推進し、またその鑑賞を通して生き生きと生活したいものです。

今回の「文化のいぶき」では、このWithコロナ時代に何を考え、どのように対応しようとしているのか、芸術文化活動団体の『思い』を特集してお届けします。

なお「狭山にゆかりのある文化人紹介」はお休みします。

コロナ禍における舞台芸術活動

劇団 大樹(たいじゅ) 川野誠一

新型コロナウイルスの猛威は、未だ終息の気配はなく、社会ではウィルスとの共存共生が図られている。私たち「演劇」の世界においても、リモート演劇やライブ配信など、感染リスクを低減させながら収益を得る方法に試行錯誤が続く。

このウィルスが厄介なのは、人間の行動を制限し、コミュニケーションを分断してしまうところだ。俳優という仕事を続ける中、近年、増えて来たのが、一般の人達を対象とした「コミュニケーション」としての演劇だ。インターネットの普及は、人と人とを遠ざけ、直接ふれあう機会を奪い、他者とのコミュニケーションが苦手な現代人を作り出してしまった。そういう人達に演劇を介し、ふれあいの大切さや他者と分かり合うことを体験してもらうのが目的となる。

私が何よりも危惧するのは、このウィルスで更に拡大してしまったオンラインでのコミュニケーションだ。テレワークを始め、配信やリモート演劇は、確かに状況的に利が大きいのが、舞台芸術というのは生身の交流であり「存在」の芸術だ。俳優の姿は、実は観客自身であり、俳優の台詞は観客の言葉である。私達は「劇場」という限定された空間で同じ空気を吸い、呼吸をする。そこに生まれる刹那と永遠は、その場を、共有することでしか得られない感動だ。自らがそこに行き、自らが目撃し、自らが触れ、そして、自らに問う。

オンラインの普及はもう止められない・・・それでも演めるのか、演らないのか、それが問題だ。



第20回 狭山市民芸術祭
創作舞踊劇「雪女幻想」
に和尚役で出演